

# IP NEWS

インテリアプランナーニュース

2006 vol.21

 HOKKAIDO  
INTERIOR PLANNERS'  
ASSOCIATION

## CONTENTS

生活感の正体 森 傑

特別企画 対談 倉本 聡×森 傑

IP受験案内

HIPA入会案内

森 傑  
Suguru Mori



もり すぐる 1973年、兵庫県尼崎市生まれ。  
大阪大学大学院博士後期課程を修了後、北海道大学へ着任。  
博士(工学)、一級建築士、インテリアプランナー。  
著書に『建築計画読本』(共著/大阪大学出版会)がある。  
2003年10月〜2004年9月に University of Wisconsin-Milwaukee の  
客員研究員として渡米していた。



# 生活感の正体

「生活感」という単語は、私たちの日常生活において頻繁に使われている。いちいち定義を確認し合わなくともうまく意志疎通が取れていることからして、その単語が指す“何か”を表現するうえで非常にわかりやすいからだろう。例えば、彼の部屋はとても生活感が漂っているとか、彼女は本当に生活感を感じさせない人だとか。けれども、私たちは確かにその単語を使ってある実感や印象を共有できているはずなのに、生活感はい体どこから得られるのか?と真面目に問われると、急に難しくなり考え込んでしまう。

私自身も、例えば大学の建築設計演習のときに、学生に対して「提案しているこの空間は生活感がない」という指摘をすることがある。こう表現するこ

とが一番適切だと思うからそうのように指摘するわけだけども、その一方で、これは結構無責任な批評だなとも思っている。実のところ、私は生活感というものの正体をほとんどわかっていないし、生活感をつくり出すのに確実な手法を指導できるわけでもない。自分の職業の正当化ではないが、だからこそ研究しているのである。

やや前置きが長くなったが、今回はこの「生活感」をキーワードとして、私が日頃思っていることを書き出してみたいと思う。

2003年10月から2004年9月の一年間、私は幸運にもアメリカという国で暮らす機会を得ることができた。“ミュンヘン・札幌・ミルウォーキー”で有名な札幌とビール繋がりであるミルウォーキーである。滞在エピソードは沢山あるけれども、ここでは日本へ戻ってきた直後の二つの体験を紹介したい。

一つは、自動車の運転である。海外生活をしたことのある人はみんないうらしいが、帰国後一ヶ月ぐらいは右折・左折の際にウィンカーではなくワイパーを動かしていた。これだけならまだしも、自分が一番驚いたのが、あるロータリーで逆回りの方向へ

ハンドルを切りそうになったことである。もちろんアメリカへ行つた直後もワイパーを動かすことはあったが、それなりに緊張していたせいか反対車線を逆走することはなかった。おそらく日本ということに気が抜けていたのだろう。無意識な中での一瞬で、これは本当に冷や汗をかいた。

もう一つは、一年ぶりに札幌の自宅に戻ってきたときのことである。渡米することが決まったあと、家財をどうするか最も経済的な方法を検討した結果、結局はマンシヨンの賃貸契約を切らずに維持することにした。つまり、普段出勤するときと変わらない状態のまま部屋をおいてきたのである。そして一年後自宅の扉を開けた瞬間、少し驚いた。「帰ったら懐かしい感じがするかな」と少し期待していたのに何の感動もなかった。どちらかというと、しばらく東京へ出張して帰ってきたときと似た感覚である。ふと見ると、愛犬も何事もなかったかのように自分のオモチャを取り出して遊んでいた。さて、このような日常の一場面から見てくることは何だろうか。一つ目の体験は、アメリカでの運転技術が身に染みついていたということ。二つ目の体験は、道具や家具が以前使ったままの状態だった

ということ。単にそれだけのことか？

私が反時計回りに逆走しかけたのは、ロータリーという場所を知覚して無意識にハンドルを切ったからである。同様に、左折する場所にきてワイパーを動かしたのである。つまりこれは、身体が覚えているアメリカ生活の記憶が、ある特徴をもった場所によって引き出されたといえないだろうか。あるいは、場所があつてはじめて記憶が引き出されると。また、私が自宅に戻って懐かしさを感じなかったのは、これまでと同じ鍵を使って同じように扉を開けたからである。そして、これまでと同じ場所に鍵を置いて同じ場所に鞆を置くことができたからだろう。つまり、帰宅するという一連の行為によって、様々なモノのレイアウトがこれまでと変わっていないということを確認できたといえないか。それは、自らの能動的な行為が期待するモノのレイアウトがそこにあるからだ。

このように、私たちの生活は身体にも環境にも記憶されている、と私は思う。いやむしろ、身体と環境とのセットで記憶というものは存在すると表現した方がよい。この身体と環境の一体的な関係に対して、J・J・ギブソンは「アフォーダンス」という

言葉を与えた。近年、アフオーダンスは様々な分野のデザイナーが好んで使いはじめているようだが、彼らの言説を聞いていて首を傾げることも少なくない。モノがもっている情報や意味あるいは人に行わせるモノの作用として、アフオーダンスを捉えていることがある。これだと機能主義的な刺激―反応モデルの視点と全く変わりはないと思うのだが、どうだろう。

ではアフオーダンスとは何か説明しろ、そういう声が聞こえてきそうである。研究者の中でも様々な理解があるようだが、私は自分の帰国体験を通して述べてきたように、アフオーダンスとは知覚における身体と環境の“一体的な関係”であると思っている。そして、やや乱暴ないい方かもしれないが、アフオーダンスはギブソンによつてはじめて新しく発見されたものだとは評価していない。アフオーダンスの意義は、実は前から何となくみんなが知っているだけであまりにも自然すぎて素通りしてきた現象に対して、それを議論のターゲットにすべく表現し、そこへ私たちの目を向けさせたことにあると思っっている。

ともあれ、話を生活感へ戻そう。冒頭で「彼の部



屋はとても生活感が漂っているとか、彼女は本当に生活感を感じさせない人だとか」というフレーズを書いた。前者の場合、生活感という単語は“部屋”にかかっている。後者のそれは“人”にかかっている。このように、生活感という単語は人間とモノのどちらに対しても表現が可能な言葉らしい。というよりも、どちらか一方に備わっているものではない何かであるといえよう。つまり生活感とは、眼前にあるモノが人間の生活の記憶を引き出すような、あるいは人間が自らのモノへの行為の可能性を求めようとするような、そういった関係を感じることはないかと思う。そういう意味では、ギブソンのいうアフオーダンスが束として現れたものが、生活感であるのかもしれない。

デザインを考えると、そしてデザインを実践するとき、生活感とはならないセンスであると思う。自らの生活感があつてこそ、デザインという活動を通してモノに価値を込めることができる。彫刻家・五十嵐威暢は、前回の対談で「あるとき、僕は計画的に作品をつくらうと考えてもうまくいかないうちに気がついた」と語った。彼が突如自覚したのは、閉じた頭の中だけでモノを考えることの

限界、モノと身体との一体の関係である感覚の大切さであったのだと思う。そして、彼が自らの肩書きをデザイナーから彫刻家へと変えたのは、生活感を最大限に駆使してつくられたモノの力を追求する、その意志表示なのだと思解している。

建築設計を業とする人間は、この彫刻家の世界が羨ましく思えるだろう。なぜならいわゆる建設業は、もちろん例外はあるけれども、一般的には設計―施工という分業システムで成り立っているからだ。実際のモノと常に直接対峙しながら設計していくということは、ほとんど不可能である。そして、建物が実際に立ち上がるよりも先行し、竣工するときの姿を思い浮かべて、“設計図”を描かなければならないのが現実である。しかしだからといって、身体とともにある生活感というリアリティを諦めるのはあまりにも弱腰だ。

また建築家はしばしば、自身が設計する建物に生活感が漂うのを避けたがる傾向がある。なぜかというところ、美しくない“からである。これは私も納得できる。どうも人間には、生活感のない抽象的な世界を美しいと感じる性質があるようだ。ある種の非日常性や神秘性に魅力を感じる、だからモノの美を



photograph by Suguru Mori

追求するとき生活感を消したくなるのだろう。私が学部生の時にサハラ砂漠をさまよったのも、生活感のない世界の美しさへの欲求だったのかもしれない。実際には生死のリスクを伴うにも関わらず。

私は“生活感のある美”というものが建築にとつての一つの核になるべきだと考えている。設計というプロセスにおいてあらゆる生活感が肯定されるわけではなく、ときには疑わなければならない生活感もあるはずである。だから、建築に携わる人間には生活感の質を見極める能力が必要である。そして、その能力を高めるには生活感というリアリティと自覚的に向き合う経験を積むほかない。北海道での活き活きとした暮らしを描いた倉本聰、彼が挑戦してきた脚本―演出という世界は、建築の世界とよく似ている。その作品から感じる人間臭さや現実臭さほどのように生まれたのか。対談を通して語られる倉本聰のモノづくりへの姿勢と実践は、私たち建築に携わる人間が自らのそれを振り返るきっかけを与えてくれると思う。

# つくるってどういうことは マン・ウオツチンダ

森：建築業界は様々なかたちの分業によって成り立っています。私自身、創造性という視点から見たとき、建築の分業システムにはある種の限界を感じることもしょなくありません。先生の略歴には脚本家と演出家という両方が書かれてありますが、それは単に二つの職能を表しているのではなく、脚本家という従来の考え方を変えて拡張させていくかたちで、モノづくりに携わっていききたいというこの表れかと思えました。そこでまず、演劇や舞台における脚本・演出への根本的な姿勢をお伺いすることができればと思います。

倉本：富良野塾でライターを指導しているのですが、20年やってもなかなかドラマの書き方を教えられなかったのです。自分ではわかっているけれども人には伝えられなかった。どういう伝え方をしたらいいか、ものすごく試行錯誤していました。ここ数年でやっとわかりやすい教え方を掴めてき

倉本 聰（くらもと そう、1935年1月1日生）  
東京都出身の脚本家・劇作家・演出家。

麻布中学校・高等学校、東京大学文学部美学科卒業。ニッポン放送プロデューサーを経て脚本家となる。日本の演劇人で、脚本、演出を1人でこなす。1973年に北海道札幌市に転居。さらに1978年に北海道富良野市に転居。同市にて若手の演劇人の養成のために〈富良野塾〉を主宰している。富良野を舞台とした家族ドラマ『北の国から』や、歌志内市、上砂川町を舞台とした『昨日、悲別で』、富良野を舞台に父子の断絶と再生を描くTVドラマ『優しい時間』の原作者。映画の監督もこなしている。三度の飯よりもタバコとコーヒーが大好きなことで有名。



ました。それと同時に自分の書き方もちよつと変わって来ました。

“木”なんですよ。木はなぜ立っているのか？それは根っこをはっているからなんです。根っこがしっかりしないと木は立たないということに気がついたんですね。根っこというのは人には見えない。木は根によって立つ、されど根は人の目にはふれずなんですね。だからドラマをつくるときは、僕が発想する登場人物のその年齢までの育ち方をさかのぼって徹底的に探ります。そして、その人物の住んでいたころの地図をかきます。軌跡とその意味を探ります。この作業が大変なんですよ。大体1ヶ月、長いところで3ヶ月くらいはこの作業に追われます。それぞれの登場人物の“根っこ”をつくってから“木”が立ってくるわけです。根っこから発想する、それがひとつにあります。

もうひとつは、僕らの仕事って何かをつくって世に送り出しますよね。発信するわけですが、先に受信しないと何も発信できない。でも、みんなすぐ書きたがる。ライターや役者を希望してくる人たちって、みんな思いつきでやってくるんですね。一瞬の思いつきでできると思っているんです

ね。いくらタオルの絞り方を教えても、タオルが濡れないと実際には絞れないんですよ。我々の仕事の60〜70%は多分受信だろうと僕は思っています。その部分だと思っんですよ、モノをつくるということはね。

森：例えば住宅を建てるということを考えてとき、設計者というものは設計図を描くプロであっても必ずしも生活のプロではないということ、私が学生に伝えたいことのひとつとして思っています。しかし、それを割り切ってしまうと設計者が図面を書くだけの専門家で留まってしまう、決して良い住宅というのは生まれないと思うのです。それを乗り越えるためには、いかに実際に生活する人々の立場になってその人々の生活を理解していくのが重要だと。

倉本：理解するというより前に、まず自分自身の生活をよく見ているかということが必要でしょう。僕が初期の家を改装したとき、当時の偉い設計家さんが女房と話をしているときに、とても感心したのです。設計家は冷蔵庫を流しのこっち側に置くという。ところが女房は、当時使っていた冷蔵



[富良野塾]  
furano\_jyuku

役者・ライターをつとめるために作られた塾。北海道から北海道人まで、全国あらゆるところから毎年20人ほど集まり、合わせて約40人生活をする。



庫の開きを考えると、作業の効率がよくないし動線上も都合がよくないという。そのやり取りを聞きまして、なるほどこういうことって俺たちは見てないなとビックリしましたね。そういうことを暮らしの中で見ていないのかというと、実は見ているんですよ。僕だって毎日冷蔵庫を開けているんですよ。どっちに開くと取りにくいとかは気にしないのですが、料理をつくとすると話は違うのですね。こういうところで、ものが本当に見えているのか見えていないのか、観察者として存在していたのか存在していなかったのかを思い知らされたんですよ（苦笑）

森：そうですね。

倉本：ええ。一方、機能的にばかりモノをつくってしまつと、“無駄”というものがとても大事になつてくるんです。“無駄”って文化だと思うんですよ。

森：“無駄”ってということが生活感につながっていく。

倉本：そうですね、ものすごくつながりますね。

森：“無駄”ということ、あるいは生活の実感。

建築の学生さんを見ていて時々感じるんですが、確かに図面を描いてしまつたら建物はできるかもしれませんが、では実際にその図面の中で自分が生活した場合どうなるかっていうことをあまり考えもせず、あるいはそういうことを直接現場に調べに行くこともせずに線だけを引いてしまつているような気がします。

倉本：若い建築家に頼むと実生活から離れるとおつしやつたけれども、それは生活の場をつくる住宅の場合、生活をする場は確実に生活の場でなくちゃいけない。そこに住む人をどのくらい知るかかっていうことが大事だということでしょう。僕はある家を建ててもらつたとき、建築家に「2年間つき合わせさせてくれ」といわれました。知り合わないとつくれないうのですよ。それで2年間本当によく遊びましたね。僕の生活習慣とか生活態度とか趣味とか確実に把握してから設計してくれましたね。



森：それはモノづくりに対する“態度”だと思うのですが、そのような“態度”を教育するということは可能だとお考えですか？

倉本：思います。そうしなくてはいけないのではないですか？

森：私もそう思います。今の大学の建築教育は、色々な建物の型、例えば住宅や図書館や美術館といった型の設計図を描き上げることのトレーニング、その比重がとても大きいと思うのです。けれども、実際にそこで生活する人々のことをよく知ろうとする“態度”については、今の教育システムは全く追いついていない。

倉本：それは、あらゆることについて同じですよ。僕のところに来る役者やライターといった連中はみんな、2年間ここにいたら一人前の役者になつてどこかが自分を呼びに来てくれると誤解しているんですよ。それはとんでもない。あらゆるアーティスティックな仕事、クリエイティブな仕事というのは農業じゃなくて林業なんだと思っています。だから1年で即席栽培なんてありえないんだ、絶

対に10年から20年は最低でもかかる。これは基本として一番先にいうことですよ。ここを出たら何かすぐにはできなくて絶対思わないでくれ、そんな教え方はできないといいます。

森：へ富良野塾におられる方々に対して、地元の人々の生活に密着しそこへ入り込むことを課されているというのも、その視点が基本にあるということですね。


倉本：ええ。それは観察するということです。

森：モノづくりにかかわる人の基礎ということですね。

倉本：そうですね。つくるということは、基本は“マン・ウォッチング”だと思います。建築も同じだと思っんですね。

森：そうですね。

倉本：例えば、建築家っていうのは設計図や建築デザインを見たりして学ぶということをされる。



でも、建築というのは第二次情報ですよ。誰かがつくったものを見ているわけでしょう。今の情報伝達方式というか教育方針というものは、全て視覚から入っているんですね。情報というのは、実は第二次情報・第三次情報の前に第一次情報がある。これは“体験”という情報ですよ。だから、その“体験”をどのくらいできているかによって情報収集の意味が変わるんですよ。

# 知識 ではなく 知恵の 大切さ

森：東京から富良野へ移住されたという背景には、ご自身が考えられるモノづくりや教育をするには東京では限界があると感じられたわけですか？

倉本：僕が東京からこっちに來たのは、単に敗れて逃げてきただけで（笑）

森：それ以降のへ富良野塾への取り組みを見て感じたのですが。

倉本：そうですね。こっちに來て出会った自然、炭鉱や農村の第一次産業の人たちですね、ああいった人たちは怖かったですよ。

森：怖いといえますと？

倉本：僕は札幌の人たちは全く怖いとは思わなか



った。でも、あの人たちに会って怖かったのですよ。なぜかというと、あの人たちは「知恵」で暮らしているから。

森：「知識」ではなく、「知恵」ですか。

倉本：そうです。家に岩があったんですね。岩が顔を出して、車が乗り上げるものだから、僕はその岩を出したかった。でも、悔しいけれども自分の力ではどうしようもできなかったのです。そこで、遊びにきていた農家の青年に「この畳一帖ぐらいいの、つかい岩を動かしたいんだけど、あんただったらどうする？」と聞いたら、「ああ、やらねばならんならやるよ」といった。僕が「どうやってやるんだ？ 重機も何もないんだけど」と聞くと、「そしたら剣先のスコップでもって周りをずうっと掘る。それで丹念に掘ってなるべく底まで出す。そこへ間伐材を2本持ってきて梃子にして動かしていく。それを一週間もやったら2、3センチは動くんでないかい」とっていったんですよ。「だから一ヶ月やったら1メートルくらい動くべさ」ときたわけです。

これにはショックを受けました。確かに僕は動

かそうとしているわけです。でも、1メートルが一ヶ月で動くというのは、僕の常識の範疇の中ではそれは「動かない」のですよ。でも彼は、「動かす」ということをただひたすら考えた。そのものの考え方。要するに、僕はそこで何とかしようということをまず諦めてしまう。しかし、彼らは何とかなるのだと思ってしまう。その何とかなるんだ、させなくてはいけないんだと思ったときに「知恵」って出てくるわけですよ。

森：なるほど。その「知恵」というのは、『富良野塾』の塾生の方々に対して先生が見習えとおっしゃっていることと繋がるのかと思いました。見習って得られるものは「知識」ではなくて

「知恵」の方で、劇を完成させなければならぬという目標に向かって「知恵」を絞っている先生の姿を見てそれを理解するという。頭に知識として入れるのではなく、体験的に理解していくことですね。

倉本：そうですね。見習っている間というのは誰も親切には教えてくれないから、自分の感性とか知恵をふるわないと習えない。

[富良野自然塾 1]  
furano\_shizenjuku



コるでの  
フセ森て  
ルさ、全  
ゴ復はる  
た回とす  
れをす樹  
さ系選植  
鎖態にを  
閉生森れ  
の。そ  
・自然、  
・自いし、  
・業、て苗  
事しし育  
還還と、  
返に的しす  
然森目取指  
自をを採程  
一とを程  
一こ種過





つて。空気なんですよ、一番は。その次に水なんです。46億年地球の道を歩かせるときに、僕は子供に30分くらい水を飲ませないんですよ。すると当然、最後にみんな水に集中しますよね。空気と水とというのが環境問題の根本なのです。人間が生きるために空気と水が必要、これが一番の基本で、そこから全部発生しているんですね。

森：環境問題といったとき、その言葉自体は広がっているわりには、私も含めて実感が無いのかもしれないですね。

倉本：ええ、実感はないんだと思うんですね。

森：環境問題への実感をもつことがまず必要だとして、モノづくりというのは人工物をつくること自体が目的ではなく、モノを使う人たちがそれを通して環境問題を実感できるような機会をつくること。それも、モノづくりに携わる側の人間に必要な取り組みだと思います。

倉本：そうですね。実は僕の「自然塾」には科学者は一人もいないんです。やっている人間は

みんな文科系なんです。だからわからないんですよ、いちいち本当に辞書と首つ引きでやって、先生を呼んできたりと。でも、文科系にだからこそできることもあるはずですよ。我々は演劇とか表現するということのプロではあるから、その表現の方法でもって環境というものをある種の感動をもつて伝えられることができれば、それがベストではないかと。それでこんなことを始めたのです。

地球が減びるといふときに自分がどうなるかをイメージすること、つまり想像力がみんな無くなったんですね。そのときに空気がなくなつて息ができず苦しみを味わつて死ぬのか、水に溺れる苦しみを味わつて死ぬのか、火がきて死ぬのか。その現実感というものを誰も想像しようとしません。阪神・淡路大震災で家が潰されたあとあれだけ大騒ぎしたのに、その後はケロつと自分はそうならないだろうと。地球が崩壊するその時に自分はどういうところにイメージションが働かないのですね。

森：そうですね。私は阪神・淡路大震災を経験した人間なのですが、近い将来確実に首都直下型地震がくると騒いでいるわりには、東京周辺に住

[46億年 地球の道]  
46okunen\_chikyunomichi



フィールド内にある代表的な施設。地球の歴史46億年の時を距離に置き換え、知識を頭に入れるのではなく、歩いて地球を体感する（1m = 1千万年）。



んでおられる方々は、あまり地震に対する恐怖を  
考えようとしていないといえますか。

倉本：環境問題をどのようにすれば人に教育でき  
るのか。例えば予備電源を切りましようとかよくい  
うけれども、なぜ予備電源のないテレビしか買わ  
ないという風潮をつくらないのか。それは、みんな  
が不便だから嫌だというからですよ。そこに問  
題があるんです。人間の消費するエネルギーをで  
きるだけ減らそうという方向へ進んでいるのが、  
今の便利さ文明なのでしょね。

要するに倫理教育でしょう。やはり、もう少し  
徳を積む教育をしていかないと人間は変わらない  
ですよ。ドイツは30年かかって環境意識を変えて  
しまったのですよ。例えば小学校の算数の時間に、  
家の前に生ごみの袋が5つありました、市の収集  
車が来て3つ持っていききました、生ゴミの袋はい  
くつ残っているのでしょうか？という教え方をした  
のです。僕は初め聞いたときはあまりピンとこな  
かったのです。でも、日本に帰ってきてある時ハッ  
としたのです。日本ではどういう教え方をして  
いるのだろうか。銀行に5万円預金があります、  
3万円引き出しました、あとにいくら残っている

でしょうか？

森：513112という知識のトレーニングに、ド  
イツではそこへ“知恵”をかぶせていった教育  
をしたということですね。

倉本：そうですね。

森：その“知恵”というのは、時代によって必  
要なことは当然変わってくるとは思いますが、  
ごみ袋で考える“知恵”のようなことは、やは  
り教育やモノづくりに携わる側の人間がまず実践  
していかないことには、どのような“知恵”を  
かぶせていったら良いのかの手掛かりが見えてこ  
ないのではないかと思います。“知恵”を出し  
合うことをみんなが意識していかないと。

倉本：その“知恵”を出す能力が失われている  
ことが問題じゃないでしょうかね。

森：確かにそうですね。

# 日本を変えるために

森：現在は富良野を中心に活動をされていますが、もし今の取り組みを例えば東京の真ん中にするならば、どのようなことをチャレンジされますか？

倉本：東京ではやらないでしょうね。「日本、不毛の地」という言葉がありますよね。「不毛」というと、「どういうことを想像されますか？ 日本に不毛の土地があるのをご存知ですか？」

森：そうですね。私自身は大阪の方で生まれましたから、コンクリートの建物がいっぱい、まわりに草木がない環境ですね。

倉本：それが不毛なんです。辞書で引くと、植物が生えないことをいうんですね。東京とかの都会はアスファルトで地面を固めているから木が生えない、あれは全部不毛なんです。今、家のそばにまた高速道路が通るっていうのですよ。僕はもう諦めているのだけれども、でも何で住宅街に新たにその高速道路が通らなくてはいけないのか。国土交通省のエライ役人が来たので、なぜJRの



上に高速道路をつくらないのかといったのです。町の人家を買収したり自然を壊したりをするよりも、どうして今ある鉄道の上を利用して高速道路にしないのか、そのことを真剣に考えなさいと。やはり、そういう発想の転換を考えることが絶対大事だ。完全に発想の転換ができる人間が出てこない、日本は荒れる一方でしょうね。

森：そういう人物が出てくる可能性は感じておられますか？

倉本：僕は思いますね。

森：最後にお聞きしますが、ベースとしての脚本家という立場をもつて、今後チャレンジしていきたい、使命といったら少し大袈裟かもしれませんが、やるべきことだと考えておられることは何ですか？

倉本：テレビからはなるべく離れたということですか？

森：そうですね。

倉本：書くこともね。

森：それは例えば舞台『地球、光りなさい！』のような方向ということですか？

倉本：舞台はもちろんやりますけれども、テレビからはなるべく離れたいですね。テレビに負担したくないですね。これに負担するっていうことは、ホリエモンのことを弟ですといった人の行動と似ているような気がしてしまってます。

森：テレビをはじめとするマスメディアを通してではなく、土着というか地域から始まるような活動ということですね。

倉本：その方が僕は良いような気がしますね。自分のまわりの人を自由に改革することと1千万人を一瞬だけ感動させること、どちらが強いのだろうと考えると、10人に深い感動をもたらすことの方が、自分の生きている意味があるんじゃないかと考えていますね。

森：今日はどうもありがとうございました。

[地球、光りなさい！]  
chikyu\_hikarinasai!



ドイツの劇作家ギュンター・ヴァイゼンボルンの戯曲『天使が二人天降りる』を元に、倉本聰氏が翻案し書き下ろしたオリジナル作品。50年近くもの間、この作品にこだわり続けた倉本聰氏が放つ、地球への愛溢れるメッセージ。



vol.18 2000.5  
特別企画  
「建築写真家のシャッターチャンス」



vol.19 2001.1  
特別企画  
「北の文化施設をのぞいて」



vol.20 2001.6  
特別企画  
「札幌ドーム」

# IP NEWS

インテリアプランナーニュース

## バックナンバーの ご案内



vol.15



vol.16 1999.5  
特別企画  
「札幌ドームの近況」



vol.17



vol.12 1996.12  
特別企画  
「北海道の中のロイヤルコペンハーゲン」



vol.13 1997.8  
特別企画  
「北海道の中の小さなスウェーデン」



vol.14 1998.3  
特別企画  
「ニュージャージーからの手紙」



vol.20 別冊 2005.5  
特別企画 「対談 五十嵐威暢×森傑」



【バックナンバーのお問い合わせ】北海道インテリアプランナー協会 事務局まで

URL <http://www.hipa.biz>

E-mail [mail@hipa.biz](mailto:mail@hipa.biz) TEL 011-765-3309 (FAX兼用)

## 編集後記

脚本家と建築家。肩書きは違ってもモノをつくりあげていくという点では同じ、そこから何か引き出せたらいいね、ということから今回の対談が企画されました。

お二人の会話をとおして気がついたことは、モノをつくる真理はひとつなんだなということ。対談がすすむにつれ、お互いの瞳が輝いていくさまは、周りにいた人もわくわくさせていきました。

倉本氏が語った中に「知恵」という言葉があります。私は早速脳にメモリーチップを組み込み、意識しながらこれからの私のモノづくりには活かそうと思えます。

一期一会、そして一語一得。今回編集するにあたりつくづく思ったのは、人との出会いは偶然であるかのように必然であるということ。貴重な体験をしました。

人間は一人でも生活はできます。けれど家族や仲間がふえることによって、単なる生活からさらに豊かな暮らしへと変わるといふのは素敵なことと思いません。

みなさん、当協会へマン・ウォッチングしに来ませんか？  
へ若竹



編集 佐々木 義則  
里見 好枝  
竹井 俊介  
森 傑  
若竹 由樹子  
デザイン 伊多波 ゆき  
印刷 有限会社 黄田印刷

## ■協会案内

1987年、建設省の告示に基づきインテリアプランナー資格制度が発足し、その後インテリアプランナーの重要性が認識されるとともに、日本全国で資格取得者が増加していきました。

北海道インテリアプランナー協会（HIPA）は、全国初のインテリアプランナーの資格者団体として1991年に設立されました。その後、全国各地でインテリアプランナー協会が発足すると、1998年には全国の協会を統合した日本インテリアプランナー協会協議会が発足しました。

協会では、インテリアプランナーの知識や技術の向上に始まり、一般的なインテリアに対する知識の普及や啓発を通して社会に貢献することを目標として、研鑽の日々を送っています。

## ■2005年度の主な活動

IPニュース発行、バスツアー（日本製鋼所迎賓館「瑞泉閣」「瑞泉鍛冶所」及び世界最大級の14,000tプレス見学）、HIPAコアトーク、IP試験講習会、X'mas デザイナーズパーティー、画工房新社屋ビル見学会

## ■入会案内

インテリアプランナーの能力を結集して各自の専門知識・技術の向上に努め、自らの社会的地位を確立するとともに、会員相互および内外諸機関との交流等を通じて社会と文化の発展に寄与することを目的とし、そのための活動を行います。

主に北海道で活動されているインテリアプランナーの、幅広い交流と各自の能力向上を目指すためにも、北海道インテリアプランナー協会（HIPA）への入会をお勧めいたします。

## ■会員の特典

- 会員証が交付されます。
- 各委員会活動、各事業に参加できます。
- 見学会・研究会・展示会ツアーなどに参加できます。
- 会誌・会報、会員名簿など刊行物やメールの無料配布を受けられます。
- ウェブサイト上で会員専用の情報を得ることができます。
- 賛助会員（企業）からの製品情報やイベント、展示会案内を受けられます。
- 会員証の提示により、文具店などから製品購入の割引があります。
- 賛助会員にとっても会員に関する情報を得ることができ、活動に参加することで会と会員に密接にコンタクトできます。

| 会費   |         |               |
|------|---------|---------------|
|      | 入会金     | 年会費           |
| 正会員  | 10,000円 | 12,000円       |
| 準会員  | ---     | 8,000円        |
| 賛助会員 | ---     | 20,000円を1口とする |
| 学生会員 | ---     | 5,000円        |

【受付お問い合わせ】

TEL 011-765-3309 (FAX 兼用)  
 URL <http://www.hipa.biz/>  
 E-mail [mail@hipa.biz](mailto:mail@hipa.biz)  
 北海道インテリアプランナー協会 事務局まで

## 国民健康保険加入のご案内

北海道インテリアプランナー協会 会員向けの保険組合『文芸美術国民健康保険組合』

日本インテリアプランナー協会として表題の組合に加盟しました。  
 北海道インテリアプランナー協会の個人事業主の方はこの保険組合に加盟できます。

|       |      |            |              |
|-------|------|------------|--------------|
| 医療保険料 | 18年度 | 月額 13,200円 | (前年 11,400円) |
| 家族    | "    | 月額 5,900円  | (前年 5,200円)  |
| 介護保険料 | "    | 月額 2,400円  | (前年 2,000円)  |

### 【保険加入資格】

- 日本インテリアプランナー協会が各地域協会（北海道インテリアプランナー協会）の会員であることを承認する。
- 各地域協会（HIPA）の会員であること。協会会長の承認印が必要
- 各地域協会会費の滞納が無いこと。
- 準会員の方は正会員と同額の年会費を納めることで加入資格があります。（8,000円→12,000円）
- 確定申告書B控の職業欄には デザイン、インテリアと記すことが条件。（建築設計業などは認められません、デザイナーである事が条件）

## ◆インテリアプランナー試験

- 受験資格  
試験を受ける年の4月1日現在20歳以上の者
- 試験科目  
[学科試験]  
インテリア計画、インテリア装備、インテリア施工、インテリア法規、建築一般  
[設計製図試験]  
建築物における空間の使われ方、生活のイメージがわかるようなインテリア設計

## ◆インテリアプランナー登録

学科試験及び設計製図試験に合格した者で、以下のいずれかに該当する者

- 学歴を有する者 [大学、高等学校、専門学校等のインテリア又は建築に関する課程を修めて卒業した者]
- 建築士等の資格取得者
- インテリアに関する実務経験のある者

それぞれに応じて所定のインテリアに関する実務経験年数が必要です。なお、所定の欠格事由に該当する者は、登録を受けることができません。詳しくは、<http://www.jaeic.or.jp/ip.htm> でご確認ください。

## ◆平成18年度インテリアプランナー試験日程

試験案内配布開始 : 5月8日(月)  
 設計製図試験の設計課題公表 : 7月31日(月)  
 受験申込書頒布 : 7月31日(月)~9月22日(金)  
 受験申込書受付 : 8月1日(火)~9月22日(金)  
 試験日 : 11月19日(日) (学科試験及び設計製図試験)  
 合格者の発表 : 平成19年2月15日(木)頃

## ◆設計製図試験・直前講習会のご案内

北海道インテリアプランナー協会では、インテリアプランナー試験直前講習会を実施しております。昨年度も、この講習会からの合格者が出ています。以下は、昨年度の実施内容です。

### 【講習会の概要】

名称：インテリアプランナー試験（設計製図）講習会  
 日時：平成17年11月6日（日）9：15～17：30  
 内容：設計課題に沿って講師が指導  
 ・受験の心得（時間配分、試験会場の雰囲気他）  
 ・平面図兼家具配置図・透視図・その他

### 【今年度の講習会のお問い合わせ先】

北海道インテリアプランナー協会 事務局  
 TEL 011-765-3309 (FAX 兼用)  
 URL <http://www.hipa.biz/>  
 E-mail [mail@hipa.biz](mailto:mail@hipa.biz)

## — 個人事業主の方々に朗報です —

※ただし、(株)・(有)等の社員、経営者は加入できません。

### 【加入手続き】

- 保険組合との手続き窓口は関西インテリアプランナー協会が行う。
- 申込は各地域協会の事務局へ申し込み依頼をする。  
後日申込書などを事務局から郵送する。
- 申込時期は随時。

### 【入会金と事務費】

- 入会金は17,500円(税込み)とする。内7,000円は事故に備えて供託金とし、退会時にはその時点で総額金を組合員総数で割った金額を返却する。
- 事務費は一年間2,500円(税込み)とする。一年毎に関西インテリアプランナー協会の指定銀行に振込。

以上個人の方は保険料が他よりも格安になっております。是非ご確認ください。



発行

北海道インテリアプランナー協会

情報委員会